

ランス探訪—アルフレッド・ジェラルルの足跡を追って

「関東遺跡文化研究会会報」第16号2008年5月1日発行・掲載

成田良幹

(1) ジェラルルの謎——その後

本会報に「アルフレッド・ジェラルルの『夢のあと』」を寄稿したのは、2003年春(2003年5月29日発行:会報特集第5号)、横濱元町に遺された「水屋敷」という近代遺構への関心から、1863年・幕末のフランス軍の横濱・山手進駐と時を前後して元町にやってきたフランス人、ジェラルルの人となりについての謎解きをご紹介した。この続編ともいえる「もうひとつの『遺跡』—横濱外国人居留地『地番』の研究」は、2003年秋(2003年10月15日発行:会報7号および2004年2月29日発行:会報8号に分載)、バンドにあったジェラルル商会の地番変更の謎を解き明かしながら、更にジェラルルの謎解きを続けた。しかし、その終章(「アルフレッド・ジェラルルの『七』不思議」)に記したように、横濱で食肉販売から事業を興し、外国船に飲料水を売り、その初期資本をもとに煉瓦・瓦の製造販売で社会的名声をなし、そして忽然と横濱から姿を消してしまった、アルフレッド・ジェラルルという男の謎は尽きない。

それから、4年が経った。90年代の初頭に、水屋敷の構造調査に始まり、横濱外国人居留地の永代借地権の調査によってジェラルルの生没までつきとめた横濱開港資料館のジェラルル研究は、新設の「横濱都市発展記念館」へと移管された。2007年2月には、筆者が「夢のあと」で示唆していた通り、水屋敷から堀川に至るジェラルルが埋設したとみられる導水管の存在が同記念館の発掘調査で確認されたことが報道され(朝日新聞:2007年2月7日)、ジェラルルの「夢のあと」は筆者の想像の実体化としてその実像を結んだ。また、同記念館の青木研究員がジェラルルの故郷ランスを訪ね、墓石に刻まれた日本語からジェラルルの帰仏年を1878(明治11年)と特定したことも、筆者には大きな驚きであった(横濱都市発展記念館・ニューズレター第8号、2007年1月「ジェラルルの故郷を訪ねて」青木裕介)。

この間、筆者は社命により、ジェラルルの工場跡地である元町77番の住居を後にして、ドイツ・デュッセルドルフ市に転居することになった。在日中にふとした契機で関わりを持つようになった「元町仲通り商店街」(元町ショッピング・ストリートの一歩山手側の「仲通り」を中心とした商店主による任意団体)の街づくりのお手伝いで、「商店街振興組合 元町クラフトマンシップ・ストリート(元町CS)」の設立発起人の一人として設立趣意書を書き上げた直後の赴任であった。2005年4月に元町CSの設立認可が完了し、ライブタウン整備工事の一環として、街の十数ヶ所にサイン(案内板)が設置されることになった。仲通りからジェラルルの工場跡地に抜ける通り(つまり前記の導水管の埋まっている通り)の角に立つサイン

に、筆者の手になる「横濱の水売り男—A. ジェラルルの水屋敷と瓦工場」という解説文が掲げられたのは2006年春のこと。この5月に、ライブタウン整備工事の完成を祝して作家の萩野アンナ氏を含むサインの解説文執筆者が街頭で解説ライブを行う、というイベントを元町CSが主催した。この際に前記のサインの前でジェラルルの解説をして下さったのが奇遇にも前出の青木研究員であった。因みに、この導水管の埋まっている通りはもともと「元町公園通り」と呼ばれていたが、これが筆者の提案により「水屋敷通り」と改称されたのは、元町CSとの関わりの中でひとしお大きな喜びであった。

こうして、筆者とジェラルルの運命の糸は断ち切られることを知らない。それは、ドイツという一見ジェラルルとは縁もゆかりもない土地に居を構えている現在も変わってはいない。こうして、ジェラルルが生まれ育ち、そして後半生を過ごしたランスは、独仏国境を跨いでいるとはいえ、デュッセルドルフよりわずか南西300kmしか離れていない同じヨーロッパの街なのだ、と思い至った時、筆者はいてもたってもいられなくなり、旅行鞆に旅支度をはじめていた。2007年も押し迫った暮のことである。

(2) ランスの街を歩く

ランス駅に降り立ったのは、12月23日の正午を少し回った頃であった。定宿にしているパリのモンパルナス駅前安ホテルに投宿し、パリ・東駅からTGV(フランス高速鉄道)で約45分。気温は昼を過ぎても氷点下のままで、晴れてはいるものの底冷えのする薄い霧のかかったような天候だった。パリの北東約135kmの距離ではあるが、数度は気温が低いような気がする。

ランスの街は市街地を中心に外周ほぼ20km内に収まってしまふほどの小さな街である。その郊外は一面の畑、特に葡萄畑が広がる、シャパーニュ地方の主要都市にあたる。線路に沿って伸びる細長い公園の灌木を横切って、ノートルダム寺院のある市の中心部に向かって南東に歩き始める。ランスは、丁度、ジェラルルが没した1915年に、第一次世界大戦による壊滅的な被害を受けているため、現在の古い街並みも主としてそれ以降の建築によるものと思われるが、パリの華やかさに較べるとどこか荘厳な東ヨーロッパの影響があるように思われる。そう、ジェラルルの葬儀は空襲を避けながら僅かの参列者により質素に行われた、とE. デュポンはその伝記に記しているが、愛するランスが戦火に破壊される有様は、晩年のジェラルルには辛く苦しいものであったろう。

人の流れるままに歩いていくと、市の中心部よりやや西側に南北に伸びる商店街の広い通りにクリスマス・マーケットの出店が並んでいた。これは、ドイツでは有名な「ヴァイナハツ・マルクト」にそっくりなことに驚かされる。ドイツでは、特に北部の都市を中心に、11月下旬頃から始まるアドヴェント(クリスマス前4週間)の期間、街の目抜き通りを中心に、派手な電飾を施した仮設小屋の出店が並ぶ。ライヒャ

ー・マン（パイプ人形）などのドイツの民芸品、焼き栗、菓子、ヴルスト（ソーセージ）、ハーブオイルなどの日用品や衣類に至るまで様々な店が軒を連ね、暗くて長い北ヨーロッパの冬場に安らぎと暖かさをもたらしてくれる。このヴァイナハツ・マルクトの最大の呼び物は、「グリュウ・ワイン」といって薬草類を安物のワインで煮出した、ホット・ワインである。小雪の舞う中、人々はグリュウ・ワインを手手に、白い吐息で話に花を咲かせるのである。因みに、このグリュウ・ワインのマグカップは毎年それぞれの店によってオリジナルのものが詠えられており、これを収集するのもヴァイナハツ・マルクトの楽しみ方のひとつである（数ユーロの「プファント＝払い戻し」を諦めれば持ち帰りができる）。

意外だったのは、フランスの街ランスのマーケットにもこのグリュウ・ワインがあったことである。”Vin Chaud”（暖かいワイン）として店に並んでいたのは紛れもなくグリュウ・ワインであった。この時は「ああ、フランスにもあるのか」と思ったきりだったが、これが後に知る、ランスにおけるドイツ文化の影響のひとつの示唆である。因みに、ランスのレストランではアルザス料理（独仏国境地域の独特の料理）のメニューを見ることが比較的多い。これもドイツの影響によるものであるが、食文化ほど明確にその住民の出自と文化的位相を物語るものはない。実は、ジェラルルの日本への「出奔」の背景にはこうしたランスの文化的位相が存在している。

われわれ日本人にはなかなか理解しづらいことではあるが、大陸の国境は長い歴史の中で常に動いている。この動く国境の狭間で、異文化は常に融合しながら新たな文化を生み出していくのだ。

マーケットを冷かしながら市の中心部に出る。古びた劇場、裁判所の建物を横目に見ながら大通りを右に入ると、目の前に壮大なノートルダム寺院がその雄姿を現す。498年にクロヴィス一世が戴冠式を行って以降、フランク王国国王の戴冠式はここで行われてきたことから、代々のフランス王家にとってランスは聖なる街であった。このノートルダム寺院は12世紀に建てられた後、第一次大戦で壊滅的な被害を受けたが、パリのものに引けをとらない荘厳なゴシック建築である。修復の際に納められた、シャガールの描いたステンドグラスは青い光を放って、どこか物悲しい。

もうひとつランスで忘れてはならないのは、シャンパンの生産である。後日（27日）に再訪した際に、市内南西部にある「ランソン」の工場を訪れた。事前予約で指定された時間に集まったのは十名程度のグループであったが、この中にもきちんと認知顔の日本人が混じっている。説明をしてくれた広報担当者は、日本は非常に重要なマーケットのひとつであり、数日前にもバスを連ねて多数の見学があったそうだ。日本の大手酒造メーカーがランソンの独占輸入代理店契約を結んでいる。

一言で言うと、シャンパンは、上等なワインになりえない糖分の低い葡萄に砂糖を加えながら発酵させ、これを瓶詰めした酸欠状態で更に数年間発酵をすすめた、発泡性のワインである。いわば北国の荒れた土

地に生育する低質の葡萄に高い付加価値を加えた工業製品であるといえる。ランソンは地下に広大な貯蔵倉を持っており、先に述べた1915年の第一次大戦の空襲の際には、何千人という市民をこの地下貯蔵倉に退避させたという。ジェラルルが生まれた頃には、シャンパーニュ地方のシャンパンは既に世界的に名の知れた商品となっており、その主要都市であるランスはシャンパン貿易において世界に門戸を開いていた、といえる。ジェラルルがこうした「国際都市」に生まれ育ったことが彼の人生を大きく方向づけたと言っても過言ではない。

（3）ブザンヌ村のジェラルルの墓地を訪ねる

ブザンヌという村は、ランスの南東の畑の中に衛星のように付随している、東西南北1kmにも満たない数十戸の小さな村である。そう、まさにランスを地球に例えれば、月のように牽引し合いながら、ランスとは距離をおいた独自の存在感を保持しているといえるだろう。ジェラルルは、父方の故郷であるこのブザンヌ村の西端、3m近い土塀に囲まれた村の墓地に眠っている。

一度目に訪れた時は、手元に地図も住所もなく、ランス駅前から殆ど英語の通じないタクシーの運転手に、ブザンヌの名と「墓地」とだけフランス語で伝え、これで十分だった。タクシーは市内の大通りを走りぬけ、10分ほどで墓地の脇の農道に横付けした。ランスに戻る他の交通手段を思いつかなかったので、15分ほどタクシーをそこに待たせて、土塀の入り口を探した。墓地は周囲約100m四方をこの土塀で囲まれており、東側に鉄扉の立派な門があった。しかし、クリスマス前ということもあるのか、鉄扉は錠で固く閉ざされており、周囲を歩く人の姿もない。門から中を覗くと、丁度南西の端に近いところに、写真で見覚えのある石の明神鳥居が見える。その下にジェラルルの墓石があるのだろう。

前記の青木研究員による、墓石に標された日本語の刻字の重要な発見が脳裏を過る。

「文久三亥年八月九日横濱入来
明治十一年七月一日横濱出立

アルフレド
ジラルル」

文久三年すなわち1863年の来日年については既に特定はされていたが、8月9日という日にちが白日の下に晒されたのはこれが初めてではなからうか。筆者がもともとジェラルルの入国日に拘っていたのには理由がある。前年の生麦事件など外国人殺傷事件が相次ぐ中で、フランス海兵隊がフランス人居留民の治安保全を理由に山手の「フランス山」に上陸したのが旧暦の6月20日（新暦では5月5日）、幕府が正式にフランス兵屯所として山手の3,042坪の無償貸与を決定し、兵舎を設営したのが旧暦8月13日（新暦6月29日）。もしも、ジェラルルがこれと前後して横濱に入港しているとすれば、やはりフランス軍の軍属の一人として来日した可能性が高いと想像できる。「八月九日」が旧暦か新暦かは定かではないにせよ、ジェラ

ールがフランス軍の進駐と相前後して来日したことは、ほぼ間違いないだろう。

更に、青木研究員も前掲の訪問記に書いている通り、明治十一年（1878年）の帰国年については意外であった。多くの研究者が1889～1990年の帰国説をとっている中で、それは「余りに早すぎる」帰国であったからだ。筆者の前掲文にも記載した通り、ジェラルールの足跡は、彼の設立した「ジェラルール商会」の存在と常に表裏一体となりながら混在している。つまりジェラルール個人の「存在証明」が明確ではないため、ジェラルールの存在は、昭和初期まで存在していたと想定されるジェラルール商会と同一視される傾向が非常に強かった。事実、1878年の帰国後もジェラルールが「自らの会社である」ジェラルール商会の経営の関与のために来日を繰り返していた可能性は高く、1889～1890年の帰国説もその出港記録に負っていると考えられる。

しかし、本当にジェラルールの帰国は1878（明治11）年であったのだろうか。墓石に記された確たる証拠を目前に突きつけられても俄かに信じがたい気がする。前掲文にも詳述したように、2000年初頭、明治政府のお抱えフランス軍人であったL. クレットマンの写真コレクションの中から偶然、ジェラルールの41歳の時の肖像写真が見つかった。これは、ジェラルールの友人であったクレットマンの帰国に際し、ジェラルール自身が撮影し（印画紙から横濱の写真館で撮影したことが判明している）友人に託したのだが、この裏に「ローニンの国の記念に」とジェラルールの自署がある。その署名の日付は1878年5月14日。1ヶ月半後に自らも帰仏することが決まっている男が、一足先に帰る友人に、果たしてこのようなものを託すだろうか。

何故、ランスにあるジェラルールの墓石に日本語が刻字されているか、というのも大きな謎だが、当然のことながら生前ジェラルール自身が日本で手配したものに相違ない。敢えて墓石に横濱の在留期間を彫らせたのは、横濱に対するジェラルールの郷愁に他ならないだろう。しかし、大切なことはその「日付」はあくまでも客観的な事実に見えながら、主観的なものに支えられていた可能性があるということである。クレットマンに自らの肖像写真を託して1ヶ月半の間に急遽帰仏せざるを得ない事由が生じたのだろうか。或いは、1878年7月1日の「渡仏」がジェラルールに、横濱との決定的な訣別を迫る何らかの事情を強いていたのだろうか。

固く閉ざされた門扉から石の鳥居を眺めながら、こんなことを考えていた。

ブザンヌには、パリ滞在中の27日に再訪した。これは、23日の夕刻、後述するサン・レミ博物館からの帰路発見したことであったが、ランスはバス便が非常に便利にできていて、一日乗車券を購入すれば観光客でも非常に効率的に街中を周遊できる。駅前バス停を調べてみると、ブザンヌにも1時間に3本の周回バスが発着していることが判った。更に、この夜、クリスマス・マーケットで賑わう商店街の書店でブザンヌを含むランスの地図を購入済みで、鬼に金棒の気分であった。パリの安宿に戻りながら「衛星」ブザンヌ

をしげしげ眺めていたところ、村からランスに向かう道のひとつに「A. ジェラルール通り」という名前が付けられていることを発見した。おそらくはブザンヌいやランスの住人にとって、アルフレッド・ジェラルールはわれわれが考える以上の著名人なのだろう。

ジェラルール通りを含め、この1km四方の小さな村をぶらりと歩きながら散策してみる気になって、二回目の再訪にはバスを利用した。バスは一旦ランスの市街を抜けて、広大な畑（真冬なので作物はなく荒野のように広がっている）の中にあるブザンヌ村へと入っていく。まるで中世の城壁にでも囲まれたような村の曲がりくねった小道をバスはすすみ、教会の尖塔が目に入るや否や、村の中央と思しき場所で降車のボタンを押す。小雨の降る瀟洒な村のバス停を降りると、酔ったような農夫が気さくに話しかけてくる。英語などが通じる筈もない。「Café, Café」と言っているらしいことによりやく気づいて彼の指差す方向を見ると、恐らく村の中で一軒だけと思しきさびれた居酒屋で、村の農夫たちが昼からワインを飲みながら、見知らぬ異邦人の存在が気になるように窓越しにこちらを見ている。愛想笑いを返ししながら、そそくさと教会に向かって歩いていく。それは中世風の尖塔を持つこじんまりとした村の教会で、その脇を抜けると、村外れに先日訪れた墓地がある。もしや、とクリスマス明けに再訪してはみたものの、やはり、墓地の門扉は錠で固く閉ざされたままだった。仕方なく街を縦断してジェラルール通りに向かうことにする。村の風景は、日本の農村に似ていて、いくつかの豪農と思しき旧家が散在し、その間に小さな家屋が軒を連ねている。小雨の降るクリスマス休暇明けということもあるのだろうか、街を歩く人の姿も殆どない。小さな学校が街の中心にあった。

A. ジェラルール通りは広大な畑越しにランスの市街地を遠くに見る、村の北側を東西に数百メートル伸びている。その入り口にあるバス停でバスを待ちながら、「Rue Alfred Gerard」のプレートの前で記念撮影をした。プレートには、ジェラルールの生没年が記されている。

（4）サン・レミ博物館にて

ブザンヌの墓地から市内に戻ると、時は既に午後4時を回っていた。再びノートルダム寺院の前から目抜き通りを南東に歩いてサン・レミ博物館に出向いてみることにした。

1931年に書かれたE. デュボンのジェラルールの伝記によると、1891年、ジェラルールは日本で蒐集したコレクション約2,500点をサン・レミ博物館に寄贈したことになる。これらは一般公開されていない、と聞いているが、博物館に行けばジェラルールに関する何らかの手懸りが得られるかもしれない、そう思ったからだった。

思いのほか徒歩には時間がかかり、サン・レミ博物館についたのはかれこれ5時半を回り、辺りにはすっかり夕闇が迫っていた。しかし寧ろ、思いついたようにその訪問を後回しにしたのは結果的には好都合で、

このクリスマス前後のシーズン、開館はなんと午後3時から午後8時、という変則的な時間であった。

この博物館は、ノートルダム寺院に次いでランスを代表する歴史的な建造物であるサン・レミ聖堂の脇にあるが、大きな中庭を持った僧院のような建物の中にある。回廊に沿って展示物が並んでいるが、古代エジプトの美術品や古代遺跡の出土物から中世の美術品まで幅広い収集物が並んでいる。入り口を入ってすぐ脇にある10m四方程度の小部屋で「日本美術の特別展」が開催されているのが目にとまった。

もしや、と思い、小部屋の入り口に展示してある20cm程の高さの人形を覗いた。それは、江戸末期の庶民の生活を映しとった、表情豊かな陶器製の9体の人形だった。泥鰯掬いの男、洗濯をする女、果物売りの行商、漬物を漬ける女、蓮根を刻む女房、酒を飲む船頭、など100年以上も前の日本の庶民の表情を、今も生き活きと見るものに語りかけてくる。解説文はフランス語で読めないが、最後にアルフレッド・ジェラルのコレクションの一部であることが読み取れる。一瞬、背筋がすうっと寒くなるような感動を覚えた。これがジェラルの生身の感性との邂逅である、と感じたからであった。



ある予感にはしていたものの、ジェラルが蒐集した日本の美術品は決して高価なものではなかった。つまり骨董的な売買を目的とした投機的なものではなかった。寧ろ、日本文化を、正確には庶民の文化を率直に伝えうる民藝品に近いものをジェラルは蒐集していたと思われる。他に展示されていたものとして、目を引くものとしては、清水焼と思しき陶器製の2mほどの大きな灯籠、そしてこれは有田焼と思える大皿、いずれも瓦・煉瓦という「焼きもの」に拘った(前掲文で、「日本絵入商人録」所収になるジェラルの瓦・煉瓦工場の内観図に、パリ万国博で受賞した賞牌が描かれていたことを指摘し、ジェラルが自らの瓦・煉瓦に工業製品として以上のプライドを持っていたことを示唆した)ジェラルの趣味・嗜好を伺うことができる。

他に目につくものは、雛人形や端午の節句人形に付随したと思われる駕籠や漆器のミニチュア。これも日本文化を小型で端的に表象するものを、というジェラルの民俗学的な関心の為せる技であると想像できる。彼は決して当時フランスで流行となっていた、「ジ

ャパネスク」を呼起するような浮世絵や甲冑類ばかりを蒐集していたのではない。寧ろ、庶民的なものに対する親近感をベースに、日本文化の民藝的な原点に迫りたいという欲求が、彼のコレクションには見えてくることのできるのだ。

サン・レミ博物館を出る頃には、冬の深い夜の帳が街を覆っていた。博物館の隣にあるサン・レミ聖堂には、クリスマスのミサを撮影するためのTV機材が運びこまれ、本来であれば深い闇に包まれた聖堂の中には、白々とした照明に照らされて、ゴシックの婉曲な天井の神秘的な陰影をつくっていた。

(5) ランス市農業サークル＝アルフレッド・ジェラル財団

27日にランスを再訪した際に、最も躊躇したのは、ランス市近郊にある「農業会館」の中にあるジェラル財団、すなわち彼の遺言で設立された農業振興団体を訪れるかどうか、ということであった。前記の青木研究員の報告にもある通り、ここを尋ねれば、ジェラルが寄贈した農業関係の蔵書が見られるばかりでなく、あわよくば、E. デュボン氏の記したジェラルの伝記を閲覧することもできるかもしれない。しかし、仏語でコミュニケーションできない中で、それは全くの無駄足になるかもしれない。ジェラルの足跡を追って、わざわざランスまで足を運んだからには、せめてジェラルの胸像だけでも一目見ておきたい、というのがランスを去るにあたっての最後の願いであった。

地図で調べると、ランス市農業サークルは、市街地の南東端に近い工業団地のような平板な土地の一角にあった。しかし、駅前路線図で調べてみると、そのような辺鄙な場所にでさえ、駅前からきちんと定期的にバスが周回しているのだ。意を決し、バスに乗る。最初は十人程度いた乗客も、市街地で一人また一人と降車していく。バスは次第に民家を離れ、広大な土地に倉庫や工場が立ち並ぶ地域を走り抜けていく。クリスマス休暇に入り、通勤する人の姿もない。農業会館の最寄りの停留所で降りた時には既に他の乗客はいなかった。

小雨の降る中、走り去るバスに取り残されたような心細さで降車したものの、辺りに道を訪ねる人影もなく、住所だけをたよりに、漸く中層鉄筋ビルの農業会館を探り当てた。

入り口を抜けると、英語が通じないことを最初から覚悟で、前出の青木氏のニュースレターに出てくる、ジェラルの胸像の写真を見せながら、「これが見たい!」と連呼すると、最初は怪訝そうな顔をしていた受付嬢もようやく得心した様子で、館内の別人を呼び出す。呼び出された女性は、どうも財団の関係者らしく、愛想よく、壁面一面に蔵書の並んだ会議室の鍵を開いて、中へと導いてくれた。言葉も通じぬ不安を抱きながらも、導かれるままに中に入ると、窓側の隅に、豊かな顎鬚を蓄えた石膏のジェラルの胸像が迎えてくれた。それは、クレットマンに託した41歳の時の精悍な肖像写真のジェラルとは雰囲気異にし、

帰仏後、悠々自適の中で農業指導にあたったジェラルルの、人柄の良さそうな好々爺の姿であった。しかし、それらは一見異なるように見えながら、やはり同じジェラルルに思える。温厚な表情の中にもきりり、と正面を見据える眼差し。それは、おそらく、没年まで絶えることのなかった、ジェラルルの情熱の証であったに違いない。

やがて、しかるべき地位にあると思しき、男性が会議室に入ってきて、親切に対応してくれるのだが、やはり、英語は片言しか通じない。まず、私自身が、日本で、ジェラルルが横濱時代に住んでいた場所に住んでいたこと、ジェラルルがランスで知られているほどには横濱での滞在の記録が残っていないこと、従って、ジェラルルの伝記の存在を知って探していること、などを手短かに英語で説明した。先の女史は男性よりは英語が理解できるようで、私の英語を彼に仏語で通訳すると、二人ともども、壁面に並んだジェラルルの蔵書の棚に、その伝記の在りかを探してくれる親切さではあるが、どうも埒があかない。結局、ランス市の図書館に行けば伝記の在り処が判るに違いない、と住所を教えてくれた。

念願の胸像も見られ、これ以上のコミュニケーションは困難だ、と判断したこともあって、彼らに暇乞いを告げ、会議室を出がけにふと見上げると、入り口の上のガラスに「レモア（ランス市）農業サークル／アルフレッド・ジェラルル財団」の文字が掲げられていた。会議室を出ると、先の男性が親切そうな笑みを浮かべながら「折角来たのだから、ジェラルル財団の理事長を紹介するが、会っていったらどうだ。」と片言の英語で尋ねる。しかし、これ以上の言語コミュニケーションは無理だろう、と判断し、折角の申し出を断り、幾度も礼を述べながら農業会館を辞したのであった。会館を出ると、小雨はいつしか小雪にと変わっていた。帰路のバス停で待っていると、無人のバスを運転して来たのは往路と同じ運転手、そして同じバスであった。

(6) ジェラルルの伝記との巡りあい

概ねこうして、延べ二日間にわたるランス探訪は終わった。パリでは、ランスでの緊張感を癒すように冬の味覚の牡蠣を堪能し、ボルドーのワインを土産に大晦日のデュッセルドルフに戻った。そして再び、仕事に忙殺される日々が始まる。

しかし、新年も明けて半月も経つと、農業会館のスタッフに勧められるままに、ジェラルル財団の理事長に一目会っておけばよかった、と次第に悔いはじめるようになった。折角、ジェラルルの謎を掘下げる絶好の機会であったにも拘わらず、自らそのチャンスを手放してしまう、とは。一方で、仏語でのコミュニケーションがとれない中で、それは致し方のないことではないか、という自答にも道理はあった。しかし、この壁を乗り越えない限り、ジェラルルの謎を追う作業は、今後一向に捗ることはないだろう。

こう悩んだ挙句、ある日のこと、意を決し、農業会館気付、アルフレッド・ジェラルル財団理事長殿宛に

英語のレターを出すことにした。その内容は、昨年12月暮に御地を訪問したこと、理事長はご不在であったが農業会館のスタッフのご好意でジェラルルの胸像を見て感動したこと、自分はジェラルルのプライベートな研究者であって、ジェラルルについて知りえたことを、ジェラルルに関心を抱いている日本人に可能な限りの確に伝えたいこと、などを切々と認め、可能であれば、返信をEメールで頂きたい、というものであった。

ジェラルル財団のワルボム理事長から直接Eメールが入ったのは、それから一週間も経たないうちのことであった。英語でのコミュニケーションは相当に難儀な様子で、たどたどしく「頂戴したレターを農業会館のスタッフに訳してもらって内容を理解しました。ご連絡頂き光栄です。次回ランスにいらっしゃる時には、英語の通訳を手配しますので、ぜひご連絡ください。」という社交儀礼的な返事が帰ってきた。

これ幸いと、Eメールの返信でまくしたてた。筆者が、ジェラルルの横濱の工場跡地の住人であったこと、ジェラルルが日本では余りその足跡が知られていないこと、自分は日本にジェラルルの正しい人物像を伝えるためにその伝記を入手したいと考えていること、など。

当初、英文のメールに余りに反応がよくないので、あるとき、ふと思いたって、PCの翻訳ソフトを使うことにした。つまり、一旦、英文で認めたレターをこの翻訳ソフトで仏語に翻訳し、これをメールで送付はじめたところ、案の定、急激にこちらの意図や趣旨を理解しはじめたようであった。日本におけるジェラルルの謎が解ける事実を、何かひとつでも知りたい、そんな気持ちで、しつこい位にメールをワルボム理事長に送り続けた。

ワルボム理事長と、そんなメールのやり取りを始めて2週間ほどしたある日のこと、帰宅すると一通の封書が家に届いていた。開封して驚かされたのは、「フランスより」という英文の短いメッセージにワルボム理事長の自署が施されたレターの添えられた、その一冊のブックレットの題名であった。

『アルフレッド・ジェラルル—横濱の

ジャンパーニュー人』

ウギエッティ・ギューヤール著・2000年刊

最初、そのフランス語の原本を手にして一瞬、躊躇したことは言うまでもない。どのようにして、この120頁ばかりの貴重な宝物を読みこなしていったらいいのだろう。しかし、そう、前述の翻訳ソフトを使えば英訳できるのだ。そうすれば読みこなすことができる。

こうして、われわれの、ジェラルルの謎解きの作業の新たなる次元が始まる。次回以降の会報にて、この伝記の原本の拙訳を連載でご紹介しながら、皆さんとアルフレッド・ジェラルルの生涯を共有できれば、と考えている。

(次号に続く)